1

　8月の蒸し暑い日であった。
　古都華のバイトに来た時に、バイト先の神社の神主に珍しい来客があった。
　神主の知り合いの警察官であった。
「あぁ、古都華ちゃん。
　バイトに来たところ悪いけどちょっと、お使いにいってくれないかい？」
「なんや？えらい神妙な顔して。」
「伽夜子さんと古都華ちゃん知り合いだろ？ちょっと依頼を頼みたくてね。」
「？」

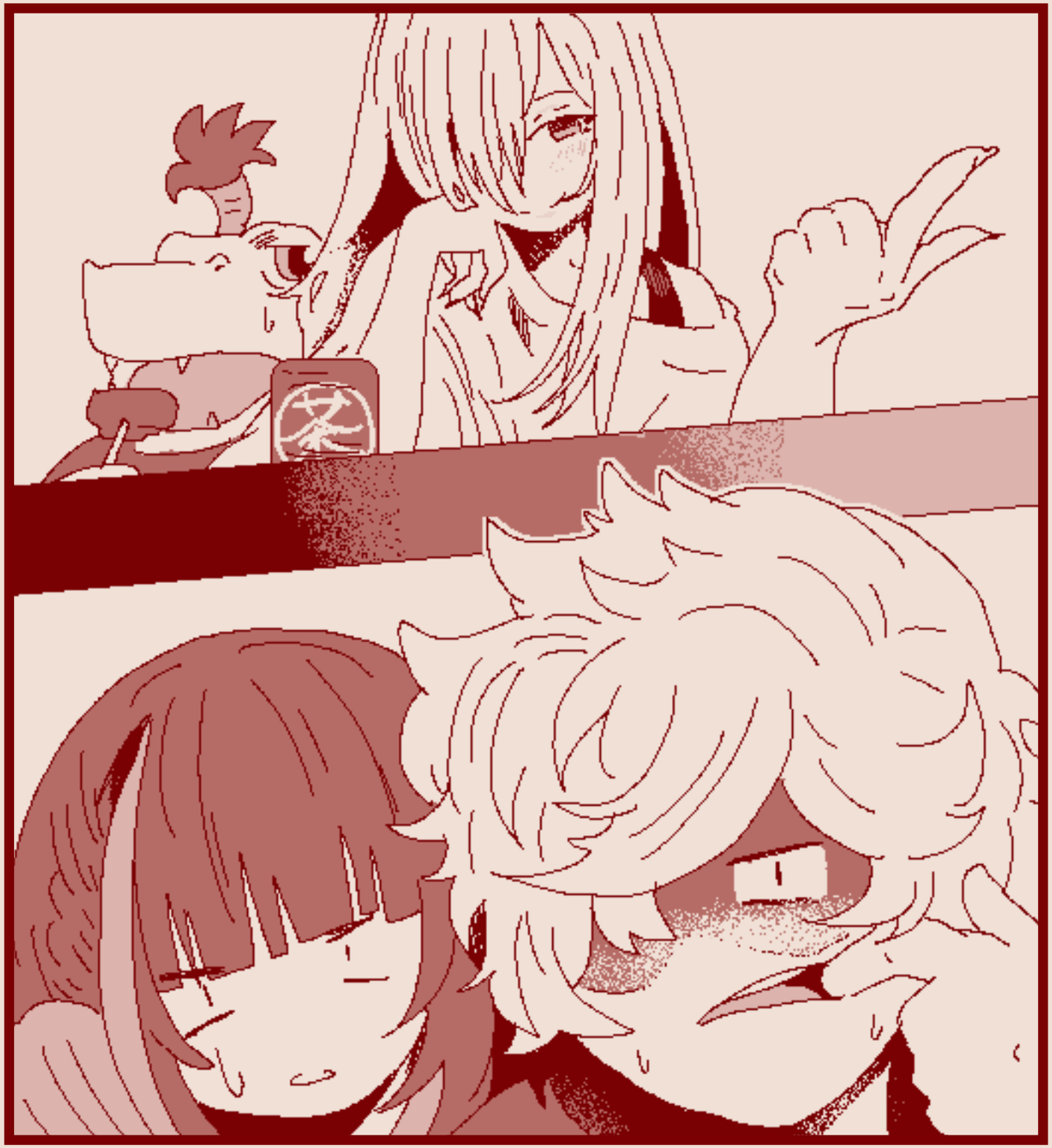
…

　依頼の内容は、この2週間で1週間置きに、起きた2つの怪事件の事であった。
　ある村出身の2名が同じ状態で植物人間で見つかった。
　その様子が異様であった。
　糞尿に塗れた被害者の周りに無数の案山子が立っていた。
　その案山子を搬入する様子は、一切監視カメラに映っていなかった。
　その案山子には、ある肉片が組み込まれていた。
　…検査の結果それは、同一人物の肉片と分かっていた。
　2名とも資産家であり、メディアに嗅ぎつけられ荒らされる前に解決したいと言う事であった。

「それで知り合いのウチの神社来たんは、分かるんやけど。
　それなら、警察と神主のおっちゃんが行くのが筋ちゃう？」
「…あの恰好のひとだろ。
　初見のひとには信用されないだろうし、古都華ちゃん気に入られてるだろ？」
「本音は？」
「いやぁ、僕もあのひと苦手で HAHAHA！五千石堂の羊羹持ってて！」
「カス!!」

…

　という訳で、伽夜子達の住むアパートに来た。
　（案外、普通のアパートに住んでるんやな。）



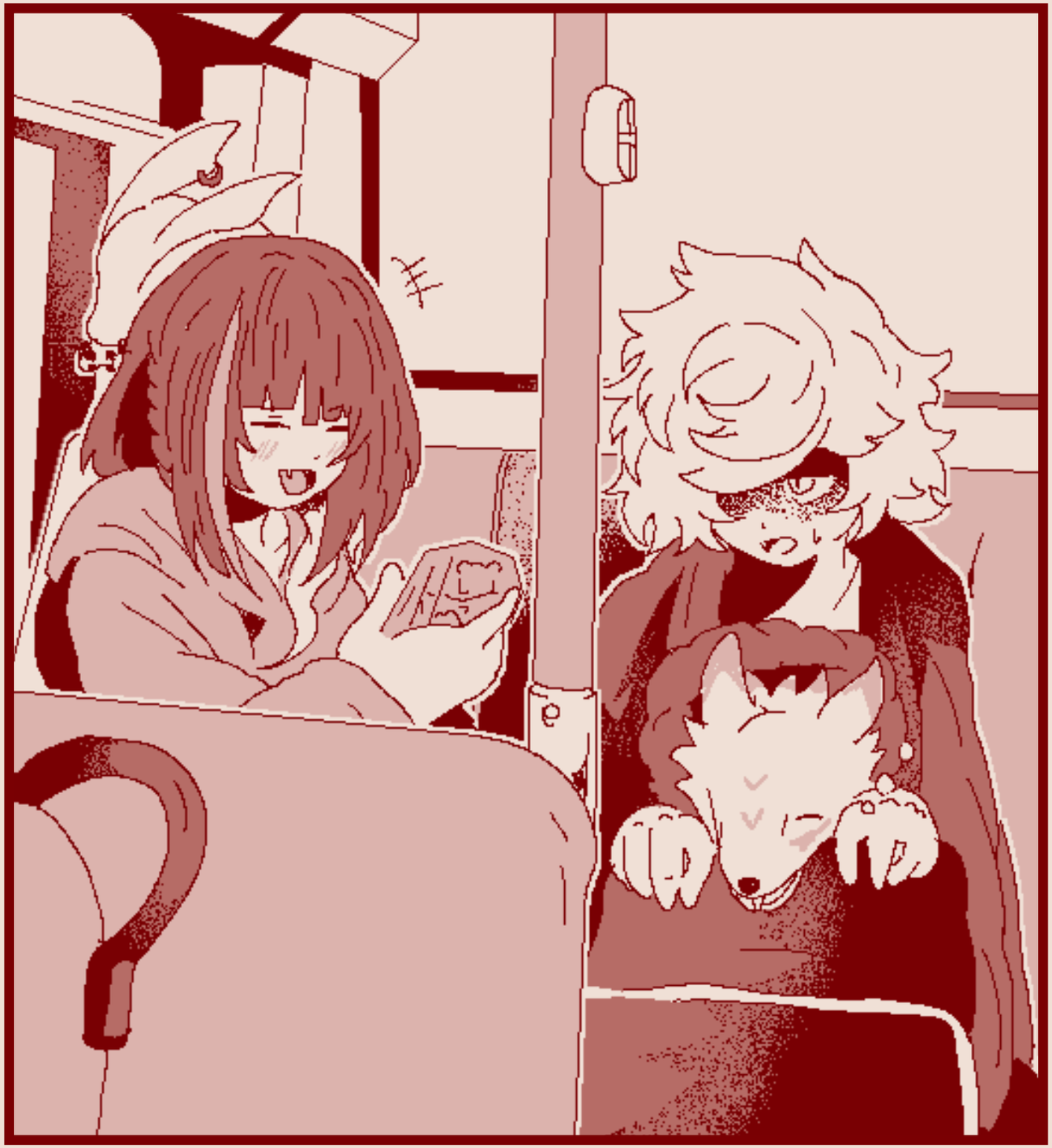
2

「はい…。」
　インターホンを鳴らすと、この世の不幸を一身に背負ったような陰気な少年が出迎えた。
「よっ！元気しとったか！夏バテしてへんか!?」
「えっ…古都…ちゃんさん？どうしたんですか？」
「あ～、ちと伽夜子さんに頼み事あってな。
　ほら、五千石堂の羊羹！」
「おんや？古都ちゃんじゃないか。
　どうしたんだい？私に会いに来たのかい？
　ま、入りな。お～五千石堂の羊羹じゃないか、月彦君麦茶出してくれたまえ。」

…

「成程…。
　まぁ、羊羹も頂いたしいいよ引き受けようじゃないか。」
「え～、おっちゃん暑い中働くの嫌なんだけど…。」
「羊羹2切れ食べといて逃げられるとでも？羊羹分働いてもらうよ？」
「ほんまか？助かるわ～。
　ほな、どうするんや！ハキハキ指示出してくれ！ウチも手伝うで！」
「いや…古都ちゃんさんは…。」
　月彦がおずおずと意志表示をする。
「あ゛～!?何水臭い事言ってんねん！」
「ですけど…聞いた話じゃ危ないですって…！」
「なんやと～月彦が随分言うようになったやないか！ええこの！」
「…いはいれす～」
　古都華が月彦の口を引っ張る。
「ふふ…その辺にしといてあげてくれ古都ちゃん。
　月彦君がそこまで言うのは結構珍しいんだ、気持ちを汲んであげな？」
「せやかて、伽夜子さん！」
「ふふ、私は行くなと言ってない。
　むしろ今回は危なくない範囲で是非協力してもらうよ？
　せっかくの夏休みだしね？」
「かよほひゃん…！」
「えっ、言っといてなんだけど拒否られる思てたわ。」
「被害者は1週間置き、次もそろそろ出るだろうし私は被害者が出るのを防ぐ事に注力したい。
　月彦君は戦闘面はともかく結界やらは駄目駄目だしね、私が適任だろうからね。
　ふたりには、事の起こり今回の原因を探ってきて欲しい。」

「「それって…。」」
「ふふ…出身二人でひと夏の冒険に行ってもらうよ。」



3

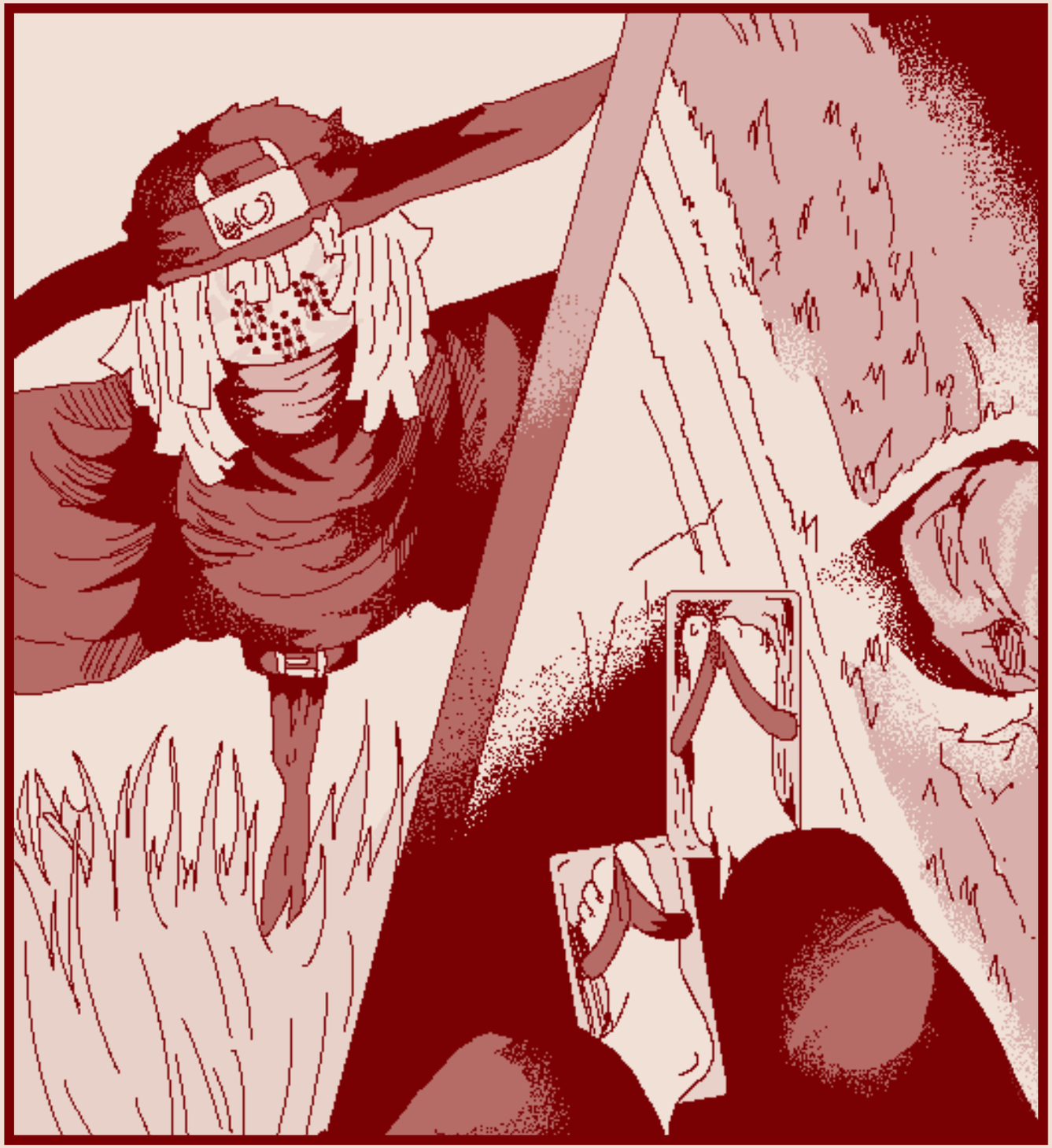
「いやぁ〜驚いたわ、話出てからトントン拍子で話進んでビックリやわ。
　流石、伽夜子さんやわ。」
　伽夜子から二人に頼まれたのは、被害者の2人の村

「あの…良かったんですか？神社の方とかご両親とか…。」
「ああ？原因調査だし矢面立たんし危なくない程度に頑張れってな！
　それよか男と二人旅の方が父ちゃん達ブチ切れてたわ！
　帰ったら殺されっかもな君！ナハハ！」
「えっ!?それ…大丈夫じゃないんじゃ…。」
「安心せえ！んな度胸ないヘタレ言うてなんとか納得させたわ！コアラマーチ喰うか！」
「…はは、いただきます。」

「ほんで、その行く村ってどんなとこなん？
　新幹線乗って来たし、結構な田舎っぽいのは分かるんやけど。」
「あっはい。
　蛇穴（さらぎ）村ってとこで、人口2千人程度の小さな村なんですけど、高級果樹の生産で一部結構有名ですね…。
　隣接市はかなり大きいですね…。
　ただ、果樹の収益や、今回の被害者2人もそうですけど名士をかなり排出してるとこみたいで合併はしてないみたいです。」
「なんや、ごっつ匂いそうな村やな。」
「…えぇ、あと毎年必ず1名以上若年者の行方不明者が出てます。」
「…なんか、もうこの時点で危険ちゃう？」
「…だから言ったじゃないですか…でも。伽夜子さんがああ言うって事はまぁ、僕らだけで対処できる範囲って事だと思います…多分。
　とりあえず、怪しまれないために文化部でフィールドワークの一環で行くという体で…今日は軽く様子見と今後、部外者がうろちょろしても噂になってもいいように役場へ挨拶に…。
　電話はしといたので…。」
「なんや結構気引き締めなあかんかもな。」

4

　トンネルを抜け、バスから降りるとそこには田舎の原風景が広がっていた。
「あ～ええなあ！こういうの！古き良き田舎って感じ…。」
「はは…涼しくていいで…。」
「「…はぁ…。」」
　ふたりは合わせて溜息をついた。
「君達？観光か？ここら辺じゃ見ないが？」
　近くで田んぼの手入れをしていた初老の男性が話しかけて来た。
「へあ!?…え…あ…あの…がが学校「学校の部活や！ウチら文化部で民俗学勉強しとってな！そのフィールドワークや！」
「あ…あぁの蛇信仰について…珍しいのが…あるってっ、役場の方にも連絡しれまふ!!!」
　男性は怪訝そうな顔をしていたが、月彦の言葉を聞いて警戒を解いた。
「お～珍しいな、ミシャクジ様の事か。
　たまに来るけど、君らくらいの年齢の子は珍しいな！」
「ははは、ご迷惑おかけします。」
「いやいや、ちょっと前からデジチューバーだか変なのがコレ目当てで来はじめて迷惑してんだよ！
　君らも気を付けなよ！あいつら礼儀もあったもんじゃないから！」



5

　ふと、月彦が下に目をやるとそこには特徴的な石があった。
「これって蛇石ですか？」
「おお、流石だね。
　村との境にあるんだ。
　これも他のとこと比べて多いって結構特別らしいぜ？」
　蜷局のような模様のある石があった。
「それよかデジチューバーが来始めたってのはやっぱこれが原因なん？」
「そうなんだよ…。」
　そこには、案山子があった。
　月彦が境界を一歩踏み越えた瞬間であった。
　異様な気配が身体を走った。
「古都華、月彦はん。」
　古都華の後ろにいたクダモンが話しかけてくる、その様子は少し緊張しているようであった。
「それとな、これはこっそりと絶対他言無用でお願いなんだけど、上（かみ）の連中には気を付けな。」
「上？」
「そ、役場行けば見えるけど段々になってる土地の上の連中。」
（異界だ…。）
　蛇石を越えた先、そこは異界、デジタルワールドに近い世界になっていると月彦は感じた。
「それよか、デジチューバーが来てるってやっぱこれなん？」
「あぁ、ほんと迷惑してるよ。
　誰か知らないけど、役場が撤去しても毎回すぐ立てられんだ。
　なんか生肉入ってるとかで、虫が湧くと稲も病気になっちゃうしな。」

6

先程、月彦達が溜息を吐いたのはこの光景と臭いであった。
　蛇石の先、境界の先…そこにはおびただしい数の案山子が立っていた。